



Title	ワン・ワールド・フェスティバル
Author(s)	柳澤, 沙也子
Citation	目で見るWHO. 2019, 68, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワン・ワールド・フェスティバル



甲南女子大学大学院看護学研究科
博士前期課程

柳澤沙也子

看護師として病院等で勤務した後、2015-2017年JICA青年海外協力隊としてインドネシア共和国派遣。2018年より現所属。NPO法人Rehab-Care for ASIAインドネシア事業リーダー。

ワン・ワールド・フェスティバルの概要

2019年2月2日(土)、3日(日)、大阪市カンテレ扇町スクエア、北区民センター、扇町公園にて、第26回ワン・ワールド・フェスティバルが開催されました。当協会は、ステージイベントおよびブース出展においてワン・ワールド・フェスティバルに参加しました。筆者は2日間、当協会サポーターとして、ステージイベントおよびブース出展にかかわったので、今回の活動の概要および成果を報告します。

ワン・ワールド・フェスティバルは1993年以降毎年開催されている、西日本最大の国際協力・交流のお祭りです。市民に広く国際協力の大切さを認識してもらい、活動に参加する機会を提供しようと、関西を中心に国際協力・交流に関わるNPO/NGO、政府機関、国際機関、

教育機関、自治体、企業などが協力し、開催されています。今年のテーマは「共に生きる世界をつくるために、一人ひとりができること」と題し、多くの協賛、後援のもとに実施されました。来場者数は2日間延べ2万5千名にのぼりました(ワン・ワールド・フェスティバルHPより抜粋)。

カンテレ扇町スクエア1Fステージおよび北区民センターでは、様々な国際協力にかかわる団体による計36のステージイベントが実施されました。ステージイベントでは、お笑い芸人が草の根・人間の安全保障無償資金協力について説明し、ステージ周辺は大勢の来場者で賑わっていました。青年海外協力隊大阪OBOG会による経験者のトークイベントでは、モザンビーク・モンゴル・インドネシアに派遣された青年海外協力隊経験者が民族衣装を着て登壇し、主に青年海外協力隊派遣希望者を対象に、現地で行った活動や、帰国後日本で行っている社会還元といった、生の声を伝えました。医療・看護に関するトークセッションは、留学

生からの生の声を通して、在日外国人が安心して医療機関を受診するために必要なことを考える機会となりました。このような様々なイベントを通して国際協力に関する情報を得ることができました。また、インドネシアの伝統楽器であるガムランやシンガーソングライターのライブ、南国タヒチのタヒチアンダンスや沖縄のエイサーといった華やかなステージも多く、普段国際協力に馴染みのない来場者であっても楽しみ、興味を持ちやすい内容が盛りだくさんでした。

北区民センターでは、約90の西日本および世界で活躍する団体が出展していました。多くの団体がパネルやポスターを使用し、団体の概要や活動する地域について説明されていました。参加団体はJICA(国際協力機構)や特定非営利活動法人、一般社団法人、市民団体等多岐に渡っていました。活動する地域のコーヒー等の特産品や、活動対象の女性団体等が手作りした編み物や織物を販売する団体もあり、大変華やかでした。写真展では、様々な国で活動する団体や個人が撮影した写真が展示されており、いきいきとした世界各国の人々の笑顔に元氣をもらいました。巨大なキャンバスに平和の絵を描くワークショップも行われており、150名もの子供たちが平和の絵を描きました。世界各国の民族衣装の着付け体験も実施されており、ボリビアや韓国等様々な国の衣装を纏い、会場を見学する来場者もいました。

扇町公園では、みんなのキッチンと題し、19団体がインドやモンゴル、スリランカ、エジプト、メキシコ、ハイチ等様々な地



ワン・ワールド・フェスティバルのちらし(左)

更家副理事長によるプレゼン(上)



WHOインターン報告会(左)

WHO協会の展示ブース(上)

域の料理を販売し賑わっていました。ナンやカレー、コーヒー等の美味しそうな匂いがしていました。出展団体は、国際協力団体のみならず、大阪周辺の料理店もあり、実際の店舗にも足を運びとなりました。また、難民キャンプテントが設置され、難民について語るブースやラグビーや太極拳といったスポーツを楽しむコーナーもあり、近隣の家族連れ等も参加し大変賑わっていました。開催当日は小雨がちらついていたものの、雨間には多くの来場者が、料理やスポーツを楽しむ姿がみられました。また、会場付近には日本一長い商店街である天神橋筋商店街があり、クリーン作戦も実施されました。

このような華やかなお祭りの中、当協会は、ステージイベントおよびブース出展を行い、会場を盛り上げました。

WHO インターン報告会

2月2日（土）11時50分から12時50分、当協会は、「羽ばたけ！国際保健医療の世界へ！！」と題し、WHO インターン報告会を実施しました。

本プログラムの前に、更家悠介副理事長による講演があり、サラヤの世界各国での取り組みが紹介されました。講演を通して、一大企業であるサラヤだからこそ行える、様々な活動があると感じました。写真が多く使用されたスライドでは、サラヤの活動を通じて今も世

界各国で健康と笑顔が広がっていると感じました。大阪をはじめ、西日本を拠点に世界で活動する著名人についても紹介され、西日本から世界に羽ばたこう、と希望が湧く内容でした。

報告会では、はじめに、中村安秀理事長が当協会の概要を説明しました。世界保健機関憲章前文、WHOの使命、WHOのSDGs（持続可能な開発目標）への取り組み、当協会の使命、入会案内および世界各国から集まるWHO インターンについて紹介しました。

続いて、3名のWHO インターン経験者が体験談を報告しました。WHOでインターンとして職務経験を積む場合、無給で渡航費や知財費などの経費は全て自己負担となっています。このため、無給で働く若者達を少しでもサポートするために、当協会は人材開発事業の一環として、WHOでインターンすることが決まった方々に対して、インターン期間中の生活費等の負担を軽減するために、申請に基づき援助を行っています。今回は、時田佳治氏（群馬大学大学院保健学研究科）、石川祐実氏（大阪大学大学院国際公共政策研究科）、吉川健太郎氏（京都大学医学部）の3名が、WHOでのインターンについて報告しました。

WHO本部SDS部門でのインターン（時田佳治氏）

時田氏は、WHO本部の、Service Delivery and Safety（以下、SDS）部門

にてインターンを行われました。SDS部門は、Universal Health Coverage（以下、UHC）の達成を目指して、医療の質（safe, high quality, effective, people-centred and integrated services）を高めるための加盟国の保健システムの改善を支えています。時田氏の活動は、チーム医療教育の観点から、Integrated People Centre Health Systemのためのエビデンス収集、医療の質の改善のための二国間協定支援・ワークショップの補佐および講義、資源の限られた国での医療の質の改善のためのツール検索、患者安全改善のためのチーム医療教育のツール開発、PSラーニングシステムワークショップやサミットへの参加、といった多岐にわたるものでした。インターンを通して、多くの先生方や仲間に恵まれ、休日には周辺国にも出かけリフレッシュされたとのことでした。時田氏の経験から、WHOの業務のイメージが広がり、大変興味深い内容でした。

WHO本部UHC達成に向けたプロジェクトでのインターン（石川祐実氏）

石川氏は、WHO本部にて、UHCを達成するためのGlobal Competency and Educational Standards Frameworkを作成するプロジェクトにかかわられました。このプロジェクトの目的は、UHCの達成に向けて、保健医療人材教育の側面からアプローチすることであり、主にミッドレベルの保健医療人材を対象とし

て、効果的な教育を行うための指針となるフレームワークの作成に携わられました。石川氏は、WHO でのインターンが始まった時期が、丁度プロジェクトの開始時期と重なったことから、WHO のプロジェクトがどのように始まり進んでいくのかを学ぶことができたと話されました。また、インターンの様子は、多くの写真と共に語られました。石川氏の、積極的に職員や他のインターン生とかかわる姿、多忙な中でも WHO でのインターンを充実させ、楽しむ様子が印象的でした。

WHO 本部アスタナ会議に向けたインターン（吉川健太郎氏）

吉川氏は、WHO 本部の Health System 局 Service Delivery 部門にて2か月間、インターンを実施されました。吉川氏の活動は、WHO 主催の国際会議であるアスタナ会議の準備であり、具体的には参加者のリスト作成、紹介状発送、加盟国間協議の運営補助、宣言文書の草案作成の補助、WHO や UNICEF による準備会合の補助等を行われました。プレゼンテーションでは、インターン生の一日の流れを説明されました。WHO 本部の写真も多く、インターン生の生活がイメージしやすい内容でした。また、インターン

をして気付いたこととして、欧米・欧州の職員は女性が約9割を占めるが、中東・アジアでは男女比が逆転すること、宣言の言葉一つひとつが時間をかけて決定されること等が紹介され、実際にWHO 本部にてインターンを経験したからこそ得られた学びが多くあると感じました。吉川氏の活動の詳細については14～15ページの記事をご参照ください。インターンを通して国際保健の最前線の場に触れた3名の報告は、いきいきとして希望に満ちており、WHO でのインターンが充実していたことが伝わってきました。

また、業務はもちろん、様々な立場で世界の最前線で活動する先生方や、今後も世界で活躍しようと励む仲間達との出会いを語る姿は非常に印象的で、WHO でのインターンは、かけがえのない経験を得られるものだと思改めて感じました。また、WHO 本部のあるジュネーブの滞在費は高額である、ということもまた印象的でした。日本のようにワンコインで外食できることはまずなく、無給で滞在費も自費という現実の厳しさ、またインターン希望者への支援の必要性を痛感しました。また、WHO 本部での食事が充実していること、一方、WHO 本部で提供される食事の食品ロスも気がかりであ

る、といった、本部の中に入りインターンを経験した若者だからこそ感じられる目線に気付かされる面もありました。3名の報告後は質疑応答の時間が設けられ、3名の将来の展望等について質問がありました。WHO でインターンを行った経験を若者に伝えていきたい(時田氏)、WHO で勤務したい(石川氏)、国際保健分野に貢献していきたい(吉川氏)といった、インターン経験が今後の人生に活きるであろう展望を語っていただき、希望に満ちた報告会でした。

当協会の支援を受けた WHO インターン経験者による報告会の開催は、当協会としては初めての試みです。当協会の活動や、WHO でのインターンに興味を持ち、高い志を持って羽ばたく若者が増えることを願うと同時に、WHO インターン希望者の、金銭面での負担を軽減できるよう、引き続き支援を行っていきたくと考えます。

多くの市民に情報提供を行った展示ブース

北区民センターでの展示ブースでは、WHO および当協会の説明や、参考資料の配布を行いました。ブースは長机と椅子2脚を設置し、渡部事務局長、木村



WHO協会展示ブース(左)

展示周辺での対応(上)



運営スタッフ集合写真(左)

休憩所(上)

理事を中心に来場者の対応を行いました。ブースの背面には、WHO についての説明、WHO 憲章前文(邦訳)、WHO の運営等、WHO の地域事務所の地図、WHO のSDGs への取り組み、日本WHO 協会の紹介、日本国際保健医療学会学生部会(以下、jaih-s)の紹介、に関する説明を掲示しました。また、当協会パンフレット、本機関誌『目で見るとWHO』67号およびjaih-sのパンフレットを設置し、来場者に配布しました。2日間のイベントを通して、当協会パンフレットを300部、『目で見るとWHO』67号は200部を配布し、また多数の来場者が立ち止まって展示物を閲覧していました。

ブースには閲覧用資料として、世界保健統計など直近のWHOの出版物、またSDGs関連資料として、各目標の世界の状況、SDGs-3の9つの目標と4つの指標に関する資料を設置しました。資料は一部の邦訳でしたが、資料を熱心に閲覧される来場者もありました。あわせて、エイズ募金箱を設置し、来場者に募金を呼びかけました。エイズ募金は大勢の来場者に支えられ、2日間で6,848円の寄付を頂戴しました。

出展ブースはNPO法人等様々な団体があり、当協会も他団体を知ることで多くの刺激を得ました。特に、映像を上映したり、パネルを使用してわかりやすく活動を紹介するブースの存在は目を惹きました。早速当協会の展示ブースにも活かして盛り上げようと、3日(日)昼より、

第2回関西グローバルヘルスの集い(3月6日開催)の紹介を行いました。ノートパソコンを使用し、第1回の話題提供やディスカッション、発表の様子がわかるスライドショーを上映、あわせて前回の活動報告および次回の開催案内を行いました。来場者の中には、学生等で興味を持ち、次回ぜひ参加したいとの声もありました。

会場内では、SDGsをテーマとしたスタンプリリーが実施されていたため、シールを集める子供達や母親らもブースを訪れました。制服姿の高校生や、中学生、様々な国籍の来場者がおられ、WHOや当協会について説明を行いました。高校生や中学生からは、「名前は授業で聞いたことはあるけど、WHOってどんなことをしているんですか?」といった質問があり、掲示物等を使用し説明しました。外国籍の来場者は「私の国にもWHOがある」「とても大切な機関だ」と興味を持ち、英文の閲覧用資料に見入っていました。また、医療関係者、市議員等様々な立場の方が展示ブースを訪れ、今後のメールマガジン配信、情報提供等を目的とし、積極的に名刺交換を行いました。

今回のステージイベントおよび展示には、当協会のサポーターも運営にかかわりました。各日8名が集まり、展示ブースの見学者対応や、会場片付け等を行いました。サポーターは大阪周辺の学生や大学関係者のみならず、東日本や北海道から訪れた方も含まれており、改めて当協

会は幅広い世代、地域の人々に支持されていると感じました。

おわりに

ワン・ワールド・フェスティバルでは様々な催し物が行われており、参加した筆者自身、大変充実した2日間を過ごすことができました。参加者がステージや料理、ワークショップ等、様々な催しを通して、国際協力を知る第一歩になったと考えます。大阪で開催されたことで、特に西日本にある団体の活動を知り、身近でかかわることのできる団体を知る貴重な機会にもなりました。これは、まさに今年のテーマである「共に生きる世界をつくるために、一人ひとりができること」に通ずる学びであったと考えます。当協会のワン・ワールド・フェスティバルへの出展は、今回が初めての試みでしたが、今回の出展を通して、WHOおよび当協会の活動を多くの市民に直接伝えることができました。また、老若男女問わず多くの市民、様々な団体と触れる貴重な機会となり、交流を深めることができました。このように顔の見える関係を作ることができたのは、団体としても非常にいい機会でした。大阪市内に事務所を置く協会として、今後も西日本のみならず日本中の市民および他団体と協力して活動を行っていきたいと考えます。来年のワン・ワールド・フェスティバルにも参加し、引き続き市民への情報提供、積極的な広報活動を実施していきたいです。